

春日直樹 編

『オセアニア・
オリエンタリズム』

京都 世界思想社 1999年 vi+246ページ

たなはし 橋 ことし 訓

I

近代以降、元来が「西洋によって名づけられた表象単位」(3ページ)であるがゆえに、地理的な島世界の实体でありながらも「仮象性」(3ページ)を拭いきることができない場であるオセアニアに生きる人々と彼らによって生きられる世界とを、西洋の人々、またある場合には日本人がどのように認識し、その認識を基点に両者間にどのような歴史的關係性が築かれた／築かれようとしているのか。と同時に、オセアニアの人々は西洋や日本によって成型加工されたオセアニア像をどのように受け止め、向かい合ってきたのか。本書は、こうした問いかけを具体的な事例において検討し、オセアニア島嶼部を中心に「オリエンタリズム形成の歴史と現在」とを考察するものである。

編者の春日は現在大阪大学人間科学部教授であり、もともと農業経済学を学び、転じて文化人類学の視座からフィジーでのフィールドワークを重ねる気鋭のオセアニストである。また、春日を含め執筆陣9名中7名は社会=文化人類学者である。しかし、だからと言って、本書を人類学分野のオセアニア地域研究の専門書であると単純に性格づけすることはできない。単に思弁的なオリエンタリズム批判ではなく、なかなか脱ぎ捨て得ない色眼鏡の存在を熟知したうえで、オセアニア近現代の出来事をいかに描くことができるのか、その際に、どうしたらオセアニアに生きる人々の視点を適切に捉えることができる

のか。本書の著者たちはオセアニアに素材を求めて実践的分析を続けながら、歴史研究とは現在と過去との象徴的な關係性を現在時点から眺める作業であることを逐次確認し、オセアニアを越えて広く「第三世界」の近現代史の基本課題に真っ向から取り組もうと試みている。

本書の具体的な構成は以下のとおりである。

はじめに

1 オセアニア・オリエンタリズム(春日直樹)

第1部 オセアニア像の構築

2 美しきものと呪われたるもの

——植民地文化における太平洋の構築

(ニコラス・トーマス)

3 南海の失樂園

——西欧近代におけるタヒチへのまなざし

(林 勲男)

第2部 植民地主義的言説の過去と現在

4 表象のたたかい

——ミクロネシア、パラオをめぐるオリエンタリズム

(遠藤 央)

5 西からの視線、南からの視線

——オセアニアに見られるオリエンタリズム

(橋本和也)

6 ニューギニア「食人族」の過去と現在

(栗田博之)

第3部 オリエンタリズム批判への警鐘

7 非核・独立太平洋運動からみる「太平洋アイデンティティ」

(ロニー・アレキサンダー)

8 政治の限界

(宮崎広和)

9 ユートピアの海

(富山一郎)

参考文献

II

「はじめに」を含む編者春日の論考により、オセアニアにおいてオリエンタリズムの問題を問う際の基本的な意味と方向性が定位される。1978年に上梓された『オリエンタリズム』でサイドは、近代の西洋世界がきわめて異質な他者として東洋を表象化

する過程を分析し、この異質性の他者認識が、西洋を基点とする自己—他者間の権力関係の正統性をいかに成型してきたのかを示した。春日は、サイドの議論を咀嚼しながら、現実のオセアニアとは「ほとんど関係ない場所」で西洋が「なかば自己生成的」に「正しい」オセアニアを語りつづけ、さらにオセアニアの人々自身が西洋から付与されたイメージを受容するに至る一連の権力関係の図式が西洋とオセアニアの間にも働いていることを指摘する(8ページ)。

西洋との間に「当惑的で否定し難い」地理的・歴史的・文化的な連続性と類似性が常に見え隠れし、それゆえに積極的な二分法的差異化が求められることになった東洋とは対照的に、西洋によって「発見」されるまで歴史的・地理的に「隔絶」し、政治・経済・軍事の力の差が歴然としていたオセアニアは、西洋による「二分法化・再構成・テキスト化」に晒されても「緊張感が欠如」したままに「ずっと容易で気取なかつた実践」を許し、「想像力」をかき立て、「はるかに柔和で無垢な姿」の「高貴な野蛮人」と「どの地域にもなかつた彩りで飾られ」た「オセアニアならではのオリエンタリズム」を生み出す結果になったと言う(9～10ページ)。それは、オセアニア「らしさ」の中核を形成する「海」、「南」、「島」の圧倒的イメージであり、特に、限定された「陸地の乏しさ」とは対照的な、支配し切れそうもないような「無限」の「海」に起因し、この「無限の観念」は、西洋の文化・知識・言説を刺激し、政治経済・資源・実在の諸問題を二次化してしまうほどの「オリエンタリズム以上にオリエンタリズム的なオセアニアの支配」を生み出したと言う(12ページ)。

ところが、春日によれば、オセアニア・オリエンタリズムの特質はその先にこそある。もともと資源に乏しい小島嶼世界の統治に西洋人は基本的な投資を避け、教育を含む社会開発にも力を注がなかつた。この統治の遅滞部分を補ったのがキリスト教会の存在で、教会はオセアニアに闇／光：現地人／白人という二分法の言説を定着させ、オセアニアの人々も表象されたとおりの役柄を演じた。しかし、キリスト教への絶対的信頼と白人の優越性を内面化した彼

らは、次の段階では習熟した西洋的な表象の操作方法を流用し、西洋と同一論理の下に「本当のキリスト教」に目覚めたオセアニア人として支配優越関係の逆転をはかる動きに転じ、19世紀末以降オセアニアの随所で植民地体制を批判する土着主義的運動が起きた。春日は、オセアニア・オリエンタリズムの中核には、このキリスト教の受容と流用の問題に見て取れるように、権力関係が貫徹しているというよりも行使／表象する側とされる側の位置づけが不確定で両義的なものであり、西洋人植民者とオセアニア人が「ともに他者として非対称的な交流をしながら、互いの主体を創出していく過程」(15ページ)があると言う。貫徹した二分法化とテキスト化が欠如するゆえに、「表象するはずの白人が、肝心の自己／他者の関係の不確定性に深くつきまとわれて」(15ページ)しまう。同じ不確定性はオセアニア人の側にもつきまとう。つまり春日は、こうした関係性の「揺れ」にこそオセアニアのオリエンタリズムの特質を求め、サイドのオリエンタリズム論のようにオセアニアをめぐる西洋「ハイカルチャー」の言説を焦点にしてではなく、西洋とオセアニア双方の「下位文化の水準」つまり両者が出遭う現場に照準してこそ「揺れ」は現前化し、確認できることを主張する。

また、1960年代以降のオセアニアでは自治を獲得した地域、独立を遂げた島嶼国が次々に誕生したが、その過程では植民地時代に白人から付与されたイメージを自ら内面化し、改めて西洋や先進諸国に対抗するうえでの民族の伝統として再提示する動きが活発化した。春日は、こうして執拗に顔を覗かせるオセアニア人による「オリエンタリズムの逆用的戦略」＝「逆オリエンタリズム」の意味を認めつつも、この趨勢はオリエンタリズムを普遍化し、「自己／他者の不確定で錯綜した現実を、あの一元的で全体的で序列化された世界へと閉じ込め直す退行」(17ページ)として批判する。

サイドによる定式化から20年を経た今日、春日は自嘲気味に「手垢」に塗れた議論と言いつつも、オリエンタリズムの議論が比較的手薄であったオセアニア研究においてこれを改めて俎上に載せることで、オセアニア理解の新しい方法を模索し、今まで

深化されてこなかったもうひとつのオリエンタリズムの問題を鮮鋭に描き出そうとする意図は非常に明確に提示されていると言える。

III

春日に続く各章は独自に素材を分析した論考であり、オセアニアのオリエンタリズムを構成する要素や状況を、権力関係を行使／表象する側とされる側の双方を含む当事者の位置性と声に留意して検討し、それぞれの現場に内包される矛盾・両義性・可能性を丹念に描き出していく。

第1部は、オセアニアを表象し西洋世界に提示した白人側に焦点を合わせたトーマスと林の論考よりなる。トーマスは、ヨーロッパ人は以前から持っていた未開な生活についてのイメージをオセアニアに対して比較的容易に当てはめて概念化できたわけではなく、種々の混乱と困惑を経てきたこと、そして、オセアニアについての表象も「高貴な野蛮人」対「野卑」といった静態的な二項対立で見切ることではできず、19世紀後半から20世紀初期のオセアニア像には出遭いの質によって「エキゾチックなもの」、「野蛮なもの」、「異教のもの」、「ハイブリッドなもの」が異なったかたちで混ざり合う多元的なものであることを指摘する。林は、ポリネシアのタヒチが1760年代に「発見」されてから1891年にゴーギャンがそこに降り立つまでの期間に西欧近代の知の体系内にこの島がいかに組み込まれ、変化したのかを、絵画、出版物の図版、演劇、博物館や博覧会の展示の内容分析を通じて描く。それによると、当初、表象する側の立場によって描く姿の差異こそあれ、悦楽の虚しさや儂さをも織り交ぜて人間味豊かに描かれていたタヒチ人像は、19世紀前半に組織的な宣教活動や英仏入り乱れての植民地化が進行すると、「暴力的で粗野な野蛮人」へと次第に変貌し、異教と異国趣味の巢窟と化した。したがって、その後にゴーギャンの描いた楽園像は植民地タヒチの現実を嫌悪し、消えかかるタヒチ文化を眼前に、せめて抑圧された表象の復権をはかろうとする試みであったと解釈される。

第2部には、表象化の対象となったオセアニアの側の解釈と主張を捉え、表象する側との対抗関係を描く遠藤、橋本、栗田の3論考が含まれる。遠藤はミクロネシアのパラオをめぐる表象生成の問題を、まず日本統治下「南洋群島」時代に求め、当該地域を日本内部に組み込もうとして論理矛盾を来した松岡静雄、南洋に原始の「無垢なパラオ文化」を求めたのにハイブリッドな像を描き出してしまった土方久功の姿を通して析出する。次いで、アメリカの庇護下で独立に至る現代パラオ国家の分析へと筆を進め、積極的に自文化表象の操作を行うパラオ人の姿に言及する。アメリカ政府報告や土方の「断片的地方誌」の記述を含めてさまざまなメディアに流布するパラオの表象は、帰属集団の優越性を維持するために読み替えられ、表象される側からの挑戦が始まっていると遠藤は結ぶ。橋本は「似て非なるもの」を鍵概念に、フィジーの事例から問題に切り込む。キリスト教や植民地政府軍を模倣して「似て非なるもの」を創出した19世紀後半の宗教＝政治運動（トゥカ [Tuka] 運動）、フィジーで生まれながらフィジー国民とは「似て非なる」インド系フィジー人、19世紀後半からニューブリテン島でのキリスト教の布教活動に派遣され「似て非なる異教徒」を目にしたフィジー人教師、第1次大戦の後援部隊としてフランスに派遣されフィジー人を「似て非なるもの」として見てきた西洋人の故郷に足を踏み入れることになったフィジー人兵士。橋本は異なる位置性を有しながら「似て非なるもの」の経験によって接続される種々の行為主体をフィジー史のなかに見出し、オリエンタリズムの問題を自己／他者の二分法で切り取ることの危うさを具体的に示す。キリスト教宣教師が持ち込もうとした「キリスト教」や「文明」も所詮は西洋の文脈から離れた「似て非なるもの」でしかないことを確認し、そうした相対化を促す「南からの視線」による対抗の重要性を指摘する。栗田はアレンズ (W. Arens) の『人喰いの神話』(岩波書店 1982年) が植民地言説批判を装いながらも、西洋人の言説のみを批判に足る素材と認定して現地の人々の声を無化し、「食人＝野蛮」という西欧の自民族中心主義を強化する植民地言説以外の何もので

もないと論破する。そして、ニューギニア南部高地州ファス（Fasu）社会でのフィールドワークに基づいて、現地の人々の声を聞き「慣習的食人の存在」を「自白」の整合性においてきっちりと認めることの意義を確認する。その意義とは、「首狩り」や「食人」を謳い文句にした「秘境探検ツアー」がバブアニューギニアの土着観光商品の目玉として売れているという現代世界システムの周縁地域の現状を捉え、現実的な妥協策として、少なくとも「逆オリエンタリズム」が有する生計維持戦略としての効用を剥奪しないことだと括る。その点、「逆オリエンタリズム」を「退行」と見切る春日に対立する。

第3部では、アレキサンダー、宮崎、富山がそれぞれ異なるスタンスから、オリエンタリズム的分析そのものの有効性を問う論考を展開する。アレキサンダーは、オリエンタリズムが西洋と東洋の（男性）強者間の関係における「上からの」西洋支配の論理にすぎないことから、まずオセアニア・オリエンタリズムという現実認識の設定自体を批判する。そして、西洋から押しつけられて太平洋の政治的主導者たちに内面化した「逆オリエンタリズム」の自己像に基づく政治文化を拒否して「オセアニアの新しいアイデンティティ形成」を模索する太平洋の非核・脱植民地・独立運動の活動を捉えることにより、「下から」の視点で「太平洋の人々が新しい政治文化を創造」し、「新たな太平洋文化と新しい主権の実像が生まれてくる」可能性への期待を表明する。宮崎は、オセアニアの自文化表象を本質論的な歴史の産物と分析した「伝統の創造」論への批判を回避すべく1980年代後半に登場した「伝統の政治」論に警鐘を鳴らし、「言説と政治への注目が逆に覆い隠してしまうもの」を暴き出す。1987年フィジー・クーデター的首謀者で首相となったランプカ（S. Rabuka）が96年に教会の祭壇上からフィジー国民に向けて行った謝罪とそれを支持する言説を分析した宮崎は、謝罪は彼が行為主体性を放擲して神に審判を委ねた精神的・倫理的に高尚な宗教的行為と評価され、政治のゲームが止まり、「信仰」が「政治」の解決策として現れた瞬間だと指摘する。そして、戦略的・政治的存在という「伝統の政治」論の主体観の盲目的

適用では、政治力学の限界を越えて存在する「信仰」を読み解けず、オリエンタリズム的＝本質論的な文化表象の分析の進展は望めないと結ぶ。富山の論考は、「琉球民族」の歴史を抱合する多元的な日本帝国の定義を試みながらもこれに挫折し、しかし琉球の海に未来を見いだそうと敢えて沈黙した伊波普猷（『古琉球』沖縄公論社 1911年）と、伊波を反復して「沖縄人」の「海外発展」の歴史的必然性と日本の南進を重ねながらも、伊波とは対照的に陰影のないユートピアの海を説いた安里延（『沖縄海洋発展史——日本南方発展史——』三省堂 1941年）の著作を対比する。そして、この30年の隔たりのうちに富山は「ソテツ地獄」で土地から引き剥がされた人々が台湾や南洋群島に展開する帝国の資本蓄積運動に労働力として包摂された軌跡を辿り、この「労働力という経験」に夢を託し「海外発展」に沖縄の未来を投金しようとする思考の芽生えを確認する。「立派な日本人」になるために生活改善（日常性の再コード化）を強いられた沖縄人にとり、「労働力という経験」は「日本人」の国民的共同体への参加として、理想の国民生活の希求として語られる。しかし、「出郷者」の「出自にとらわれた身体」はそこに理想を完遂し得ずに、「国民」の枷を越えて海に流出して「帝国の夢」への登場を繰り返す。富山は、自己／他者や植民者／被植民者の表象の構図ではなく、異なった次元で帝国主義に通底する「労働力という経験」を注視し、「労働力におさまりきらない身体」の可能性を見いだすことの必要性を強調して締め括る。

IV

春日の問題提起に連なりつつも、オセアニア・オリエンタリズムの理論化の困難を表象の歴史性と多様性において示したトーマス、林、遠藤の論考。歴史性と多様性の問題を「西からの視線」と「南からの視線」の交錯において多配列的に捉えて自己／他者の二分法的思考の限界を明確に提示した橋本の論考。「逆オリエンタリズム」を「一元的で全体的で序列化された世界へと閉じ込め直す退行」として見切ることを困難にする生存戦略の声の多様性を示した

栗田の論考。政治・社会的エリートと言説に終始するオリエンタリズムという問題設定の眼差し自体の欠陥を暴くアレキサンダーの論考。言説表象は、政治と権力関係のドグマを棄却して漸く得られるもうひとつの視点において分析されねばならないことを提起する宮崎の論考。自己／他者や植民者／被植民者への分節ではなく、帝国主義と資本の蓄積運動への合流と離脱を繰り返しながら構築される身体の経験の全体を捉える重要性を主張する富山の論考。春日の問題定位を受けつつも、8つの論考はこれに適切な距離を保って独自にオセアニア・オリエンタリズムの問題に喚起された思考を展開する。この総体が本書の心地良い不協和音とも言えるものを構成している。そもそも、オリエンタリズムが貫徹した一枚岩の表象支配の様態ではありえず、各地域植民史の出来事の肌理において、表象する側／される側の双方において、さまざまに内部の亀裂や葛藤を抱え込みながら自己／他者の二分法の前提すら無化するような権力関係の複雑な様相を孕んで進行するものであるとすれば、この心地よい不協和音の提示そのものが本書の意図した実践なのだとも言えようか。オセアニア・オリエンタリズムを扱って、その理論化を急ぐことの危険性、分析様式の歴史化の重要性が本書により改めて的確に示された。

しかし、本書の基本姿勢に背くように、春日自身の問題設定において、オセアニア島嶼部、それも18世紀末の東ポリネシア（と西洋によって呼ばれるようになった）地域に生じた西洋とオセアニアの出遭いにオセアニア・オリエンタリズムの特質を還元する傾向が見て取れる点には問題を感じる。オセアニア島嶼部に限っても、西洋のポリネシアとの出遭いは、一様ではないメラネシアとの出遭いやマイクロネシアとの出遭いと対位法的関係の中にあり、オセアニア島嶼部との出遭いは、本書では論じられなかったオーストラリアやニュージーランドとの出遭いと対比のなかに構築されたと評者は考えている。

西洋によってニュージーランドと呼ばれることになったアオテアロア (Aotearoa) の島世界に生じた西洋とマオリの視線の交錯を16世紀後半から丹念に追いかけた、サルモンド (Anne Salmond) の *Two*

Worlds (Harmondsworth: Viking, 1991) や *Between Worlds* (Harmondsworth: Viking, 1997) などの浩瀚にして出色の仕事がある。また、サイドの問題提起への対応ではなく、オセアニアを対象とした西洋の表象行為が論題ならば、サイドに先んじること18年、西洋による南太平洋の表象化を克明に分析した美術史家スミス (Bernard Smith) の *European Vision and the South Pacific, 1768-1850* (Melbourne: Oxford University Press, 1960) 以降の仕事もある。実のところ、これらの仕事が議論の中心的俎上に載って春日の意図と対比され、そのうえでポリネシア島嶼部を中心化しない視野の中で西洋によるオセアニアの表象化の「諸問題」が総括されることが望ましかったと思われる。そして、その先には当然、石川栄吉の仕事（『日本人のオセアニア発見』平凡社 1992年）に代表される日本人のオセアニアの表象化をめぐる諸問題の指摘との対照を経て、「地続き」の議論が待っている。

本書で扱われなかったオーストラリアとニュージーランド、それにハワイは、白人が数多く入植し、先住民がマイノリティー化して生きる世界であり、初期の出遭い以降の歴史において他の島嶼部とは幾分異なったオセアニアの表象化の問題を孕んでいる。「隔絶」ではなく「同居」し重なり合う西洋とオセアニアの相互表象の問題がここにはある。また、この2国と1州は、オセアニア島嶼部（特にポリネシア）の人々が早くは19世紀末から自由労働移民の目的地に据えてきた場所でもある。その結果、現在では、ポリネシア人10人のうち6人から7人は環太平洋地域のメトロポリス（オークランド、シドニー、メルボルン、ホノルル等々）に定着して生活を送るまでになり、オセアニア近現代史の重要な側面である労働移民、あるいは「帝国の夢」を遡上していくオセアニア島嶼民の流れは、オーストラリア、ニュージーランド、ハワイにおいて、先住民・白人・移住島嶼民の間で、そして出自を異にする移住島嶼民相互間での近代以降の「オリエンタリズム」の生成を促した。1870年代から1910年代にクィーンズランド州にプランテーション労働者として来豪・定着したソロモン諸島民を中心とするメラネシア系オース

トラリア人の存在もこれに連なる問題群を提起する。さらに、還流的な出稼ぎや移住の道を選んで環太平洋メトロポリスに生活する者や帰還者を「根なし草」と呼んで、彼らに対してホームランドの人々がいわれなきスティグマを付与し、自分たちとは異なる側面を秘めた他者として突き放して表象化する傾向も、オセアニア島嶼部の社会問題として夙に顕在化している。

本書の事例研究と理論研究は、オセアニア研究はもとより、社会＝文化人類学や歴史研究に広く資するものと高く評価されるが、ここで評者が指摘したようなオセアニアを捉える視座と過去に連なる現在の分析に全体的な見取り図の接続をはかることで、その成果は一層先鋭化され则认为られるので、ここに敢えて指摘した。

(東京都立大学人文学部助教授)